

孫文とRed Cross

——『紅十字会救傷第一法』、訳出と再版の意味するもの——（下）

（津久井高等学校）篠崎 守利

〔要旨〕

前稿（上）では孫文のRed Crossとの出会いと彼の博愛思想の特質を分析した。これに続く本稿（下）では、第一に清末中国におけるRed Cross波及事情を上海『申報』等にした。第二に20世紀初頭、孫文訳本『救傷第一法』が日本の東京で再版されたことに着目し、その意味するところを考察した。

清末の博愛思想は、革命思想を共振させた。女性革命家秋瑾は日本留学を機に博愛を唱え、また孫文も博愛思想を革命戦略の一端に位置づけた。彼ら革命派が博愛を革命の起動力とし市民戦争（Civil War）を志向した局面を析出しつつ、孫文の博愛観、Red Cross精神のゆくえについて、問題提起をおこなった。

目次

I. はじめに

II. 孫文とRed Cross（“英国赤十字”）との出会い——医師カントリーとオズボーン

III. 教本“*First Aid to the Injured*”訳出——『運動病院講義 済急第一法』と『紅十字会救傷第一法』

IV. 博物学者・南方熊楠の目に映った革命家——「支那人スンワン」と“孫逸仙”

V. 孫文のRed Cross観——Red Crossと博愛

〔註〕（1）～（46）

（以上、前号掲載。以下VI～VIIIは、本号掲載）

VI. 清末中国のRed Cross事情——『申報』と北洋軍

VII. 訳本『救傷第一法』再版——革命戦争とRed Cross精神

VIII. むすびにかえて——中国Red Cross精神のゆくえ

〔註〕（47）～（85）

VI. 清末中国のRed Cross事情——『申報』と北洋軍

日本において、創業時（1877年）以来の「博愛社」から日本赤十字社へと改称し、Red Crossを日本が公式に受容した1887年前後、隣国の中国においてはRed Cross伝播をめぐる事情はどのようなであったか。

1880年代の極東では、フランスと中国との間でヴェトナム領をめぐる衝突が生じ、清朝中国が敗北した（1884～85年）。すなわち清仏戦争であるが、この当時Red Crossがこの戦争に登場して活動する余地は無かった。なぜならば、欧米のRed Crossには非ヨーロッパ世界とくにアジア・アフリカにRed Cross精神を持ち込み、戦時救護をおこなう意向がこのときまではほぼ皆無だったからである（トルコは例外）。このRed Crossに内包された当時の意向の限界については、1887年開催の第4回赤十字国際会議（ドイツのカールスルーエ）における会議の紛糾がその内実を教えてくれる。この会議に日本が極東アジアとして初めて参席したことで、欧米Red Crossの視界に日本が捉えられた。折も折、提起された第10議題（オランダ提案）が「欧州の諸会〔各国赤十字〕は欧州外の戦あるに臨みて傷病者の救護を為すべきや否や」というものであった。この議題は、欧州各国がアジア・アフリカなど植民地のジュネーブ赤十字条約未加盟地での紛争においてはRed Cross活動が猶予されることを予見させるものであり、これをいち早く見抜いたのは西洋文明のプレッシャ

一に苦慮する日本であった。ときに日赤側代表・石黒忠恵の通訳として参席したのが森林太郎（後の森鷗外）であったが、鷗外は石黒の意を代弁し、日本は「賛否の外に立つべし」すなわち欧州側の手前勝手な提案には賛否に与しかねるとの異論を主唱、会場は「議論百出」となった。翌日持ち越しとなった結論は、未加盟国への人員援助はしないものの、各国は可能な限り交戦国に支援をおこなうとの修正案で妥協が図られた。修正案に対して日本（鷗外）は「若し夫れ本題に反対せる場合即ち亜細亜外の諸邦に戦あるときは、日本諸社は救助に力を尽す」と発言、会場に「全会社哉（Bravo!）」との喝采の嵐が沸き起こった⁴⁷⁾。これは、欧州人の意識下にあった従前の自己完結・自己閉鎖的な行動原理が突破された瞬間である。この瞬間について、『赤十字とアンリ・デュナン』の著者吹浦忠正氏は「赤十字が単にヨーロッパないし白人のキリスト教文明社会間のものから一挙にグローバルな存在としての拡がり」となったことを感じさせるものと評価する⁴⁸⁾。この吹浦氏の評価のごとく、1880年代後半になって初めて国際赤十字は大きな転換期を迎えた。

1880年代半ばまで清国は、未だRed Cross活動の埒外にあった。とはいえ、キリスト教宣教師の伝道活動においてはRed Cross活動につながる動きがあり、Red Cross活動あるいはその周辺的行動が兆していた。とくにプロテスタントの場合は医療伝道を重視していたこともあって、米国コングリゲーションリスト（公理会）に属し米国外交官でもあったピーター・パーカー（漢字名、伯駕 or 巴駕）やロンドン伝道会のベンジャミン・ホブソン（漢字名、合信）ら多くの医療宣教師が来訪しており、1835年にはパーカーが広州に博濟医院を創設したし、1850年代にはホブソンが上海の仁濟医院の医師として活躍した。また、1873年には女医コンブス（漢字名、苛姆絲）が北京で看護師養成を開始、1888年には看護師エラ・ジョンソ

ン（漢字名、約翰遜）が福州に中国最初の看護師養成学校を設立した。1889年には病院および診療所だけでも、中国各地で61か所が数えられるまでに達した⁴⁹⁾。さらに、慈善・公益活動では米国メソヂスト（監理会）宣教師ヤング・ジョン・アレン（漢字名、林樂知）や英国バプティスト（浸礼会）宣教師ティモシー・リチャード（漢字名、李提摩太）らの活動がよく知られる。彼ら宣教師の一部には伝道活動と合わせてRed Cross活動を導入しようとする者たちも含まれていた。先にあげたT・リチャードはその典型事例であり、変法維新派や開明的な中国知識人沈敦和らに接近し、やがてRed Cross活動の創業（1904年中国紅十字会設立）を実現、中国紅十字史上に記憶されるべき人物となった⁵⁰⁾。

それでは、日常的にRed Crossに接するようになった当時の中国人たちにとってはそのRed Cross観とはいかなるものであったのだろうか。

1890年代、日清戦争を機に中国大陆にRed Cross情報がいっきに流入、中国Red Cross活動が黎明期に入った。情報流入の先駆的な事例を見ると、上海の新聞『申報』1894年12月19日の記事「行軍以医生為要説」に行きつく。鄙見のかぎりであるが、これこそ中国ジャーナリズムの先鋒『申報』がRed Crossすなわち紅十字について触れた最初の所論であった⁵¹⁾。この所論は、題名のとおり軍営に軍医が必要であることを説いたものであるが、その一節で、西洋では戦闘に際して軍と教会の2方面から医師を同行させること、教会の医師は紅十字会員であり、戦場では紅十字標章の付いた衣服を身につけ、敵軍であれ負傷者に出遭ったならば治療の措置を施すというルールがあることに言及した。加えて、これに関わる事実として『申報』12月19日の記事が取り上げたのが、台湾の英国人宣教師マイヤー（漢字名、梅威令）による1887年の紅十字デモンストレーションの一件である。マイヤーとは誰か。彼は台湾「慕徳医

院」の医師であり、中国Red Cross史上初めてRed Crossに関する示威的広報活動をおこなった人物である。

「慕徳医院」は、1860年代に英国長老会医療宣教師P・マンソン、D・マンソン兄弟が台湾の打狗にて税関の医師となり、医業を興してマラリア等熱帯病医学の研究をおこなったのを端緒とする⁶³。1879年以降税関の医師を引き継いだのがマイヤーである。マイヤーは医業を拡張し1881年～86年の間にデーヴィッド・マンソン記念病院（David Manson Memorial Hospital）を開院、西洋医学の医事人員を養成する医学課程すなわち医学校を併設した。この病院を台湾名で「慕徳医院」と表記する⁶⁴。この病院の西洋医学教育は、P・マンソンが教務長となった「香港の西医学校（1887成立）」と「合作した」ものだという⁶⁵。ここでの医学課程がどのようなカリキュラムをもったものかについては現在不詳であるが、結果としてマイヤーによるRed Cross行動が出現したことから何らかのRed Cross講座が展開されたことも否定できない。

「慕徳医院」経営に勢いを得たマイヤーは、ほどなくしてRed Cross活動の実践に踏み出す。清仏戦争での清国敗戦直後の1887年、紅十字の小旗を手に持ち、袖には紅十字の標章を付けた医学生たちを率いて大陸に渡り上海租界工部局に出向いた。ここで戦時救護のデモンストレーションをおこない、さらに李鴻章の北洋海軍に出向き、当局の実力者に軍営中にてRed Cross事業を行えるようお願い出たのである。が、「少しも意に介されず一笑に付されて」終わった。この一件に関しては、すでに1880年代当時の上海『申報』紙上にも取り上げられたことがあったが、中国医術と西洋医術の可否問題としての側面だけに終始する内容で、記事中には「紅十字」、「赤十字」の文字はまったく見あたらない（前出註64）を参照されたい。『申報』に「紅十字」もしくは「赤十字」の文字が登場するのは日清戦争勃発以降（1894年12月）

のことであり、マイヤーのRed Crossデモンストレーションの一件は10年以上経過して後初めて、昔年の後日談として『申報』紙上に紹介されたのであった⁶⁶。なお、マイヤーは台湾へ帰還したが、その後の消息はまもなく途絶えてしまう。一説によれば、1901年離台したともいう⁶⁷。彼に育てられた医学生たちについても詳細は不明であるが、一部の者は「〔中国〕官憲筋における一般的な無視と冷淡さ」に失望、中国を離れて英領海峡植民地に移住していったと考えられる⁶⁸。

芽吹きかけた中国のRed Cross活動は萎えて、ここでいったん姿を消してしまう。じつは清朝当局のかくのごとき無視や冷淡な態度は、けっしてRed Cross活動に限られたことではない。これと密接に関わりあう慈善・公益事業においても五十歩百歩であった。たとえば、1877年5月2日の上海『申報』の一例をあげてみよう。山東・山西の飢饉を取り上げ、西洋人たちの「救災は用兵よりずっと善」との考えに触れ、清国の「今は軍費を調達して無用の土地を争うことに力め、災民の救済に費用を振り向けずに反って有用の人間の方を軽んじて〔苦しめて〕いる」無慈悲さを嘆く⁶⁹。西洋人の言葉にかこつけて「左伯相」すなわち欽差大臣左宗棠のイリ西征（1876年）を批判したものであるが、「五十万人も死亡する」勢いの災害があるにもにかかわらず大切な人間を救済しようもしない当局の無策ぶり（博愛心の無さ）に呆れた内容の記事である。類似の記事が幾度となくこの前後の『申報』をにぎわしており、まさに窮民救済の状況が眼前にあるにもかかわらず、少なくとも当局者の対応はRed Crossを問う以前のレベルに止まるものであったことが知られる。

北洋軍等におけるRed Cross無視・無理解は前述の一件の通りではあるが、わずかながら、その周辺にあつて無視・無理解に変化が生じてゆく状況が見られることを指摘しておかねばならない。西洋医学の面からの変化の兆しであり、当時を代

表する当局者曾國藩と李鴻章の二人における事情に触れておく。両江総督・直隸総督として豪腕をふるった曾國藩は、自身の養生は漢方に頼るだけであったが、家族のためには西洋医を招き、結果として息子の曾紀沢が西洋医学の優秀さを称賛するということが見られた⁶⁹。また、李鴻章は1870年代末に妻が「伝統医師に見放された後」に、ロンドン伝道会医師マッケンジー（漢字名、馬根濟）に救われ、「西洋医学に宗旨変えをし」信頼を寄せるようになった⁶⁹。李は、このことを機に北洋艦隊の医業整備を推進することを決断し、1881年西洋医学を学ばせるための天津医学館を創設した。これは中国自弁による最初の医学校であり、1893年以降は北洋医学堂と改称され、海軍医学堂の始まりとされる⁶⁹。しかし、これらが果を成すほどに医療状況や世情が改善された訳ではない。とくに自弁による医学館創設については唯一の試行として孤立しただけで、1900年代になるまで北洋軍の医業分野には目に見えるような進展は見られず、他への波及効果も十分に生まれなかった。多くの場合、昔日のまま無視・無理解のなか時間だけが経過した。天津医学館創設から15年後の事態がこれを証明した。すなわち日清戦争が勃発すると、「支那軍隊には、負傷者に対する何等の設備もなかった。兵士は倒れたまま捨て置かれ、徐々に餓死するか、或ひは少しくましな凍死よりほかなかった」⁶⁹という現実が露呈したからである。中国の負傷兵は、日本の赤十字社の救護事業によってか、もしくは欧米人らが核になって俄か作りした収容施設（私設のRed Cross）の救護活動、時に英国巡洋艦の救援隊の活動などによった救護措置を受けたのである。欧米人らによるRed Cross活動（私設「赤十字病院」）は、やはり欧米人が上海で立ち上げた私設「赤十字社」によって救護費用を支弁された。が、これらの私設「赤十字社」、私設「赤十字病院」は戦争終結とともに霧散霧消した。日清戦争での清国敗戦までは、マイヤーの

一件で知られるように、台湾・中国大陸の両地ともに伝道医療活動に乗じてRed Cross活動が波及してきていたにもかかわらず、時の軍当局にもメディアにもその有意義性が理解されることはなかった。このことは、当時の中国がRed Crossにおいてはなお夜明け前であったことを教えてくれる。

清仏戦争期に芽生えかけた中国Red Cross活動が10年近く経ってようやく再発見された経緯は前述のごときであるが、真に理解された再発見であったのかとなると、じつは疑わしい。なぜなら、『申報』の前出所論⁶⁹は、西洋式の軍営のあり方に無理解な中国当局者の頑迷ぶりを嘆くものの、最後の結びでは「今ひとたび有事となって負傷者救護が必要となったとて、なんで紅十字会の者や不倶戴天の日本の奴らに力を借りなきゃならんのか？ 旅順の負傷兵たちをば〔紅十字会や日本の奴らが〕なんで我が中国人に代わって治療などするのか？——これだから軍営に〔自前の〕軍医が必要と説くのである」と締めくくり、所論の本音がRed Cross評価にないことを吐露しているからである。軍医の育成、西洋医学の振興については主張するが、Red Crossの有意義性については理解の埒外に置いてしまっている。当時のRed Cross観についていうならば、メディアを含む知識人層、李鴻章ら官僚支配層における理解がきわめて貧弱であり、その浅薄さが窺える。ただし、李鴻章の死によって事態がもう一步改善に向かう。直隸総督および北洋大臣を引き継ぎ北洋軍の総宰となった袁世凱は、自軍内の軍医体制の改革をもう一步進め、医院を設立して疫病を予防すること、紅十字会を設立すること等を図ることとした。1901年以降のことである（1902年には、北洋軍医学堂が設立された。これは06年には陸軍軍医学堂と改名され、先に李鴻章が創設した海軍医学堂と並び立つこととなった）⁶⁹。

上海『申報』紙上に「紅十字」「赤十字」の文字が登場してさらに数年後（1897年）、孫文訳本

『紅十字会救傷第一法』が刊行された。当該訳本の登場は、どのような意義を近代中国史上に残したのだろうか。じつは、刊行数年目にしてこの訳業情報が中國大陸に届けられており、メディアの注目するところとなった。そのメディアとはやはり上海申報社である。1904年3月5日の上海『申報』の記事「中国宜入紅十字会説」中に次のように紹介された——「孫文の訳した『紅十字会救傷第一法』のごときもまた、実に役立つもので、無視できない代物である」と⁶⁵。上海申報社は、孫文が“革命党”、“逆犯”（1898年1月29日「防内患説」）であることを重々承知の上で、かくも好意的な評価を与えた。この評価の事実は大変重大である。孫文訳本『救傷第一法』が当時の中国人にとって有用性の高い救護法に関わる医療情報であり、「無視できない」Red Cross情報と見られたということになる。この埋もれていた反響、『申報』による好意的評価に関する指摘は、池子華氏の研究（2004年）による⁶⁶。池氏の研究は、孫文研究においてもRed Cross研究においても新たな局面を開くものであり、今後とも『救傷第一法』が中国近現代史上に第一歩をしるした事情についてさらに解明されることを期待したい。

Ⅶ. 訳本『救傷第一法』再版——革命戦争とRed Cross精神（博愛）

『救傷第一法』は革命家孫文の訳本であり、事はメディアの反響だけに終始して終わりということにはならない。事実、該書は革命派の勢いが高揚していくなか、本格的な印刷（再版）に付されることになった。それは1907年2月、孫文の日本再訪直後のことである。書名も『赤十字会救傷第一法』と改められ、在日の中国人革命派宣伝機関たる民報社（東京）において印刷された。『民報』第12号（1907年3月6日発行）および臨時増刊号『天討』（1907年4月25日発行）には該書の「再版」広告が掲載された——その広告に言及されている

が、再版に際して革命思想家の章炳麟が「序」を付したという。孫文と章炳麟の当時の関係性を含め、要検討の課題が浮上するところではある。が、筆者は現在までのところ、「序」の内容を確認できておらず、これ以上の言及は避けたい。再版本が中國大陸でどのように更なる反響をもったのかについては、残念ながら今後の研究に待つしかないが、そもそも再版したことそのものに大きな意味があるのではないだろうか。同じ1907年に女性革命家秋瑾が「看護学教程」（原著は日赤篤志看護婦会のテキスト）を翻訳、公表したが、ここでは秋瑾そして孫文の行動と主張に注目したい。

日露戦争の前後、中国本土や留日中国人学生の間でRed Cross活動が日清戦争以来あらたな思潮を迎えた。このなか、留日中国人女子学生が1903年Red Cross精神を鼓舞する共愛会を組織した。女子学生とは胡彬夏、陳彦安らであるが、共愛会は上海の各女学堂に向けて「国難急、女子学生は赤十字社に入り、義勇隊とともに北征せん」と訴えた⁶⁷。そして実際、1904年夏には日赤篤志看護婦会に入会さえした⁶⁸。同04年には女性革命家秋瑾らが留日女子学生にもう一度呼びかけ、共愛会を再興する（実行共愛会と称す）。彼女は帰国後に日赤篤志看護婦会会の講義（看護法）を翻訳、「看護学教程」と題して『中国女報』1・2期（1907年1月）に発表した⁶⁹。彼女は「看護学教程」訳序の中で「博愛」精神の大切さを訴え、その育成を推奨した。また一方、中國大陸では京師衛生医院の院長廖太夫人が1906年5月北京に「婦人会」（中国婦人紅十字会）を組織した。廖太夫人の動きは「日本の愛国婦人会、赤十字社、篤志看護婦〔人〕会の発達」に刺激を受けて生じたものであった⁷⁰。なお、この動きに先立って、秋瑾が廖太夫人に同調の思いを抱き、詩を献じている——その詩とは、1903年「贈京師衛生女学医院廖太夫人」であり、そこにおいて、廖太夫人（名は邱彬忻）の胸中に古代の名医廬和（扁鵲）と同じ

「救世心」（世人救護の精神）のあることを讃たえ、熱きエールを込めてこの詩を太夫人に贈ったのである⁷¹⁾。Red Cross思潮を留日学生界においてだけでなく、中国大陆にも及ぼそうという留日学生らの意向が形成され、また、一步一步ではあるが、思潮が大陸に及んでいく様子が見て取れる。

ただ、秋瑾の思いはなお深い。「看護教程」の序文の中で、彼女は博愛を「我が博愛」と称し、「我が博愛を諸姉妹に捧げるものである」と訴えた⁷²⁾。じつは、彼女がいう「我が博愛」とは戦時救護（看護学教程に盛り込まれた戦時看護）のことである。というのも、「他日、東大陸に有事あらば、負傷者を救護する。思えば、我が多くの姉妹たちよ、その責務を逃れることはできない」と断言するからである。それでは東大陸に起こる「有事」とは何か、ということになる。すでに日露戦争も終結してしまっている。1907年の時点であり、「有事」とは他人様の「有事」ではない。「我が多くの姉妹」の責務に関わる「有事」である。彼女が想定した「東大陸の有事」とは革命軍と清軍との間に生ずる「有事」であり、それは革命軍による革命戦争ではなかったか。彼女が革命戦争を念頭に置き始めていたことは、秋瑾処刑時に清朝当局が搜索し押収した「光復軍起義檄稿」や「光復軍軍制稿」が示唆を与えてくれている⁷³⁾。この秋瑾「看護学教程」翻訳の一件と合わせて考察するならば、孫文の『救傷第一法』再版の意味は明確になろう。

孫文が総理となって中国同盟会を発足させた翌年（1906年）、孫文ら革命派は『中国同盟会 革命方略』を策定した⁷⁴⁾。そこにおいて「軍政府と各地国民軍との関係」や「軍隊の編成」を唱え、整理する。先の太平天国の時には、湘軍など郷勇が太平天国軍を殺戮した。だから、「太平天国が転覆しても、〔同胞どうし怨み合って〕湘軍は〔解散しても〕帰るところがない」、「彼の楊〔遇春〕、曾〔国藩〕、胡〔林翼〕、左〔宗棠〕・李〔鴻章〕諸人

にはいったいどんな魂胆があるというのか。祖国を存続させんとすれども反って亡ぼし、同胞を自由にせんとすれども反って奴隷にしている」、「思うに、同胞を以て同胞を殺すことは、実に天下に極まる賤しさであり、ただ万国が嘲笑するだけでなく、同胞が切齒扼腕するところである」、「満州人もまたこれを賤しみ、漢人は殺し合いを種性と思い甘んじて奴隷となり、それで宜しとする」⁷⁵⁾——中国同盟会が編成する「国民軍」は郷勇ではない。換言するならば同胞を以て同胞を殺戮する軍ではない。自虐的な行動様式をとることは革命軍たる「国民軍」が希望する革命戦争とは別ものであり、これを「国民軍」の戦争すなわち革命戦争と呼ぶことはできないという考え方が示されており、「国民軍」の戦争は革命戦争をめざすものであるとの戦略が暗に提起されている⁷⁶⁾。

戦争形式において考察するならば、革命戦争とは内戦型の戦時行動であり、その先例としては孫文らが登場する四半世紀前のアメリカにおいてCivil War（1861～64年。日本の歴史学界では「南北戦争」と称す）が発生しており、これは往事の未収課題（アメリカ独立革命後も生き残った旧思想）を払底していったもので、革命戦争に相当する。19世紀後半パリでもコミューンが樹立され、アンシャンレジームの残滓（王党派）一掃をもとめる戦時行動が起こったが、これも市民あるいは国民が互いに敵性を有する戦争ではない。パリ・コミューンは隣国によって叩き潰されたとはいえ、これもフランス大革命の最終決着をもとめる革命戦争であった（その後のフランスが第三共和国に移行し革命戦争は結果的に成果を得たことは、誰もが知るところである）。なお、革命戦争にあっては、第三者的中立を保つのであれば他国民が敵性を有する戦争にはなり得ないが、他国民といえども旧体制、旧勢力に加担しようとするサイドに位置するならば敵性を有することになる。

中国に視角をもどそう。革命派において、将来

勃発する「有事」が想定されたということは、漢族と満族の間の種族革命という形態を有しつつも、アンシャンレジームへと堕しつつあるダイナステイを徹底破砕しようとする内戦すなわちCivil Warを実行しようとする思念が中国人の意識上に初めて本格的に立ち現われたことを意味する。孫文ら革命派は『革命方略』において、革命軍たる「国民軍」編成を計画し、その編成「条件」を宣揚する。「欧米日本の各国では軍人が尊敬されるが、それは戦力となり、〔万里の〕長城のごとくに頼りになるからである」とし、「一、城鎮、鄉村あるいは〔清〕軍にある者で反って〔国民軍に〕帰するならば、賞給を終身倍額とする。……。二、〔清〕軍から即投降するならば、家族を保護する。〔国民軍に〕逗留するならば才器を優遇する。故郷に還るといふのならば手当、資材を厚くし故郷帰還を保証する。三、自発的に投降するならば死罪を免れるだけでなく、捕虜扱いとして処置する。四、投降しないならば、殺され、赦されない」⁷⁰と。四については、共愛や博愛という観点からすると、湘軍批判すなわち「国民軍」思想と矛盾しておりやや徹底さに欠けるところがあるが、いったんは旧来の仇敵・味方間の情念を洗浄して新型の「国民軍」を編成しようとする意向が見える。そうした「国民軍」による革命戦争を志向する意図と覚悟が形成されたことを『革命方略』は示している。この『革命方略』策定の翌年、これと並行するかのごとく『救傷第一法』が「再版」されたという事実は重い。戦争を想定したところに、戦時救護は要請されるのであるが、とくに中国においては革命戦争が想定され、かつこの革命戦争すなわち市民戦争、内戦にともなう戦時救護の対処手法が同時進行で準備されることになったと考えられる。ただし、戦時救護の対処手法が準備されてゆくとはいえ、それは救護の技術論が先行したものである。救護の原理や理念——すなわち中国のRed Crossはどうある

べきかを問うネクスト・ステージについては、なおその後にあらためて検討する時が措定されねばならない⁷¹。各国の事情もあり同位比定すべくもないが、日本では「博愛社」から日本赤十字社に発展するまでにちょうど10年の試行を要した。黎明期を越え創業期に差ししかかったばかりの中国には、Red Cross専論がなお出現していない、それが20世紀初頭の中国Red Cross事情であった。専論を誰にもとめるのか、少なくとも秋瑾にこれをもとめることは歴史が許さなかった。彼女は1907年、大通学堂事件で逮捕され、7月には刑死する運命を負ったからである。それでは、孫文にこれをもとめることができたのか。彼の場合も政治状況が、結果としてこれを許さなかった。革命と政治を実践する大義がRed Crossのネクスト・ステージに踏み入り留まる余裕を孫文に与えなかったからである。

ともにRed Crossのステージに留まることを許されなかった孫文と秋瑾であるが、とはいえ博愛においては同志であった。孫文ら革命人士の視線の向かうところには革命戦争が想定されている。凹面鏡が種々の光を受け止めてそれを焦点に集光させるがごとく、博愛もまた“凹面鏡”の作用をもって広く会党や士人、男女の種々のエナジーを反射してこれを革命戦争という一点へと集中させるのである。博愛という“凹面鏡”を手にしたことは、革命派の認識が、旧来の民変や民乱などではなく、近代的な市民戦争、革命戦争を想定する初期段階（革命の組織としても革命の戦略としても）に確実に到達したことを暗示している。少なくとも孫文訳本「再版」は、1897年初版（君主への「〔上〕呈」）の時点とは明らかに異なる意向が孫文ら革命派の陣営に形成された結果であり、単に印刷事業上の用語にもとづく再版の概念では収まらない。革命派（中国同盟会）の行動、戦略上における「再版」であったと言わなければならない。この点については、2000年にすでに鄒振環氏

の研究において近似的指摘がある⁷⁹。すなわち、「このたびの『赤十字会救傷第一法』」重印は、同盟会の第一弾の組織的行為であり、反清武装起義の救護工作を始めるために、知識上の準備を為したものだと言及している。が、筆者はよりいっそうポジティブに「再版」をとらえるべきであると考え。ポジティブに意味づけて規定するならば、「再版」とは革命戦争と戦時救護との連動の関係性の上で使用された用語であった。「再版」は革命戦争を起動するキーワードであり、秋瑾を含め、革命派にとって重要な暗号であった。もちろん孫文にはRed Cross精神がなかった、などというつもりは毛頭ない（後章Ⅷを参照されたい）。秋瑾にも博愛の精神があったのと同様に、孫文にもまぎれもなく博愛の精神すなわちRed Cross精神があった。しかも、孫文においては、清末の民生主義誕生期にすでに博愛の思想が民生主義の一角に存置されていたのではあるが、博愛が単に戦時救護としてのそれだけでなく、前章Ⅴ（前号）で言及したように、広くは民生主義のコンセプトの中に包摂されていくものであった。このように思念し構想する筆者であるが、残念ながら、ここではこれ以上に体系的に論ずる余裕がない。現時においては、孫文のRed Cross精神が、出会った当時のそれとは、内実においては異なるベクトルを内包したものへと転回したと指摘するだけとする。この点に関しては、今後あらためて検討を要する研究課題である。

Ⅷ. むすびにかえて——中国Red Cross精神（博愛）のゆくえ

孫文自身の著述や演説などを点検するならば、前述したようにRed Crossに言及したものは、ほとんど見あたらない。だからといって、活動初期に出合い培ったRed Cross精神すなわち博愛思想を、孫文が放擲してしまったという訳ではない。1911年10月辛亥革命が勃発し、11月半ばには孫文

の下に「速やかに帰国して臨時政府を組織するように」との帰国要請の秘密電報が届けられた。電報を孫文が受け取ったのは、偶然にもロンドンのカントリー邸においてであった⁸⁰。孫文にあっては、革命達成の光明がRed Crossの恩師の下でまさしく輝いた時である。奇跡的で偶然のなせる業であるとはいえ、筆者にはRed Crossと革命とがスパークしあった象徴的一瞬に思えてならない。

民国期に入ってから、孫文のRed Cross精神はおもに夫人である宋慶齡によって継承されてゆく。1921年、辛亥革命以前からクリスチャンとして博愛思想を抱いていた宋慶齡が広東省の番禺に紅十字会救護隊を組織すると、広東軍政府の長であった孫文は南海・番禺・順徳紅十字分会連合会総裁を引き受けた。そして番禺紅十字会のために「博愛」の扁額を題し、Red Cross精神の根幹思想を国民たちに掲示した⁸¹。1910年代以降天津で少年期を過ごし1950年代に中国籍を得たユダヤ系ジャーナリスト、I・エプシュタインは言う——「彼〔孫文〕は一貫して人道的であったが、一方で闘士としての決意をもっていた。武装した敵に対して、彼は武装して挑んだ。しかし、もし敵が革命軍の手に落ちた場合は、彼らに肉体的な虐待を加えてはならないと指示した。彼がひどく嫌い、また禁じたもののほとんどは、拷問であった。それは彼が反対して闘ってきた古い専制君主政治のみにくいやり方の一つであったし、彼自身の陣営においても断じて赦してはならないことであった」⁸²と。1938年以降40年間にわたって宋慶齡の傍らで亡き孫文の姿を探し求めてきたエプシュタインのこの記述は、宋慶齡から聞き取った孫文回憶である。ここに語られている精神は、まさにRed Cross精神そのものであり、かつて番禺に掲げられた「博愛」の扁額が決して偽りでもなく決して形だけのものでもなかったことを我々に教えてくれている。

孫文のRed Cross精神を受け継いだ宋慶齡は、

孫文存命中にあっては恒にRed Cross闘士として紅十字隊を率いて孫文に随行したし、孫文没後にあっても前進し、1920年代半ばの広州国民党政府にあっては紅十字隊の維持拡大の任に就いた。彼女は国民党中央執行委員として政治訓練学校の女子学生を指導する業務をこなしつつ⁸³、紅十字会への入会呼びかけや救護活動に精力を注いだ。1927年以降の武漢国民政府にあっては、27年3月衛生部の設置を提案して救護体制の確立をめざし⁸⁴、5月には「北伐紅十字会」（結成大会にて、じつは北伐傷兵救護会と改称）の初代委員長となり、8000人を超える負傷者が押しかけるなか、病院を建て戦時救護活動を展開し、また在住外国人たちの参加協力を取り付けることなどに奔走した。そして何よりも、孫文訳本『紅十字会救傷第一法』が北伐戦争中に「衛生部隊を訓練する教材として」使用された⁸⁵ことは、宋慶齡の孫文に対する畏敬の念と少女時代からの自身の博愛精神の交錯と連繋がそこに見い出せるのである。

1930年代以降、「満州事変」を前後にして、それ以前にもましていっそう無理無体で過酷な中国侵略を帝国日本は畳みかけてしまう。内戦と侵略戦争の二重苦に翻弄された中国人たちにとって、中国国内および国際社会のRed Cross活動はどのような存在として機能し、どこまでその役割を果たし得たのか。そして中国人社会にあっては、孫文が残したRed Cross精神がどのように生かされたのか。十分明らかにされているとは言えない。これからこのRed Cross精神のゆくえが究明されねばならない。課題が多々横たわっている。

100年前の1911年10月辛亥革命が起こり、翌12年1月をもって中国にアジア最初の共和国が誕生した。孫文はその共和国の臨時大総統に就任した。その百周年が近い。一方、アンリ・デュナンによって発起されたRed Crossが国際活動（ICRC）として創始されたのは1863年であり、Red Cross創業百五十周年まで、あと数年でもある。が、私

たちが究明すべき諸課題は多い。歴史上に残されてきた課題を見つめ直し、功は功としつつも過去の諸課題を後世に先送りしてはならないと考える。諸兄弟のご叱正をいただくこととなれば幸いである。

【註】

- (47)第4回カールスルーエ赤十字国際会議については、これに日赤通訳として参席していた在独日本人留学生森林太郎（森鷗外）「独逸日記」にその状況が活写され、記述されている。森鷗外『森鷗外全集』（岩波書店、1975年）第三十五巻「独逸日記」p.174〈明治二十年九月二十六日～二十七日〉の条。
- (48)前出、吹浦忠正『赤十字とアンリ・デュナン』（中公新書、1991年）p.177。
- (49)伝道宣教師等による医療活動については、石田秀実『中国医学思想史』（東京大学出版会、1992年）、ラルフ・C・クロイツァー（難波恒雄ほか訳）『近代中国の伝統医学』（創元社、1994年）、ルーシー・R・セーマー（小玉香津子訳）『看護の歴史』（医学書院、1978年）、日本赤十字社『世界看護史』（1932年）等を参照。
- (50)バプテリスト宣教師T・リチャードらの慈善・公益活動については高橋孝助『飢饉と救済の社会史』（青木書店、2006年）に詳しい。中国紅十字会の設立に関わった前後の事情については拙稿「清末中国の赤十字活動に関する一考察」（『学習院史学』第34号）を参照されたい。
- (51)『申報』1894年12月19日（光緒二十年十一月二十三日）「行軍以医生為要説」の中に「紅十字会」への初めての言及がある。『申報』1898年5月9日（光緒二十四年閏三月十九日）「創興紅十字会説」において、「十余年前」の「紅十字」小旗等の件が出てくる。が、十余年前の『申報』1886年6月12日、1887年7月21日・28日・29日、9月14日、1888年7月28日、9月29

日（光緒十二年五月十一日，光緒十三年六月一日・八日・九日，七月二十七日，光緒十四年六月二十日，八月二十四日）にあつては，いずれも同じ題材を扱っていながら「紅十字」小旗等に触れた箇所は見当たらない（「論中国習西法所以致弊之由」，「訳西報述考試医学事書後」，「述台湾打狗慕德医院弁理原由」，「述台湾打狗慕德医院学生考試情形」，「論西医将行於中国」，「論梅威令医生教習之認真」，「医国篇」）。

(52) 前出，朱真一『從医界看早期台湾与欧米的交流』「Dr. Patrick Manson（萬巴德）」p.45。

(53) 莊永明『台湾医療史——以台大医院為主軸』（台湾遠流出版，1998年）pp.38～39。上海『申報』1887年7月28日「述台湾打狗慕德医院弁理原由」によれば，当時の慕德医院の来院患者数は年間4000人にもものぼったという。医院の創業を1881年とする説もあり，劉国柱主編『中国医学史話』（北京科学技術出版社，1994年）は「1881（年）打狗に曼松〔マンソン〕紀念医院を開設」とする（p.236）。

(54) 前出，朱真一『從医界看早期台湾与欧米的交流』p.45。

(55) 『申報』1894年12月19日（光緒二十年十一月二十三日）「行軍以医生為要説」。

(56) 黄武東・徐謙信編，賴永祥増訂『台湾基督長老教会歴史年譜』（台湾人光出版社，1995年）〈1901年3月20日〉の条に次のようにある——「聞くところによれば，Dr. W・W・Myers（1879～1901年間，外国人医師として南部台湾に在った）が離台したために，彼が主持していた慕德医院（Manson Memorial Hospital）は〔台南〕教士会に譲渡され，教会医院とされた」と（p.118）。少なくとも，1901年3月の時点ではマイヤーはすでに台湾を去っていたことが分かる。

なお，マイヤーの一時的な消息として，後藤新平が台湾民政長官に就任した当時の逸話をあげることができる。ときの台湾統治国である日

本は，当地にいた外国人を外交顧問等に採用，高給をもって待遇した。その顧問の一人が英国人マイヤーである。後藤は1898年に入台したが，直後からマイヤーと反りが合わず冷遇，たちまちマイヤーの方から辞任を申し出させるようし向けた。これは事実上の解任であったという（鶴見祐輔『〈決定版〉正伝 後藤新平』3（藤原書店，2005年）「マイヤー追放的一幕」pp.88～91）。

(57) ラルフ・C・クロイツァー（難波恒雄ほか訳）『近代中国の伝統医学』（創元社，1994年）p.52。「宣教師が台湾に設立した医学校の最初の三人の卒業生が，『適当なポストを見つけられず』，イギリスの海峡植民地〔マレー半島南部の旧英国直轄植民地シンガポール，ペナン，マラッカなど〕に移住した」とする。この情報は，王吉民・伍連徳『*A History of Chinese Medicine*』（天津，1932年）に拠ったものである。「宣教師」の名がマイヤーであるかについては明記されていないが，当時の前後関係からしてマイヤーこそが該当者であると筆者は考える。また，同じく医学生3人とは，『申報』1887年7月29日（光緒十三年六月九日）「述台湾打狗慕德医院学生考試情形」において紹介されている3者のことであり，当時22歳であった呉傑謨および21歳の李荃芬，19歳の陳呈榮であるとも考えている。

(58) 『申報』1877年5月2日（光緒三年三月十九日）「論英人論去歲災事」。

(59) 前出，クロイツァー『近代中国の伝統医学』p.51——「曾国藩は……家族のために外国人の医師を招くことを認め，その息子の曾紀沢は，全面的に西洋医学の優越性を信頼するようになった」とする。なお，林維紅「無言の女眷——《曾紀澤日記》女眷生活輯録」（台湾中央研究院近代史研究所『近代中国婦女史研究』（第10期，2002年）所収）にクロイツァー説を裏づけるデータが整理され掲載されている。この中で林氏

は、〈輯録四：就医〉において、光緒五年～十一年の曾家への医師来診一覧を作成している。出てくる医師の名には明らかに西洋医師の名と思わせる事例が多数含まれている。たとえば、1879年（光緒五年）9月3日、6日、9日、1880年（光緒六年）3月11日、16日、17日、19日、25日、28日の来診医師は「馬克勒衣」であるが、「マックレー」の発音名か。また、1882年（光緒八年）11月24日、12月3日、5日の来診医師は「多蓄」であるが、「ドーレ」の発音名か。1883年（光緒九年）12月6日、14日、27日の来診医師は「博爾司」であるが、「ボルス」の発音名か、といった具合である。

- (60)前出、クロイツァー『近代中国の伝統医学』p.51。クロイツァーは「〔李鴻章の〕妻が伝統医師に見放された後に、西洋医師の治療によって救われ」たとする。クロイツァーは「西洋医師」とするだけであるが、上海医科大学医史教研室の高晞氏によれば、その医師はロンドン伝道会のマッケンジーである（「在近代中国的“医学伝教”」，朱維錚主編『基督教与近代文化』（上海人民出版社，1994年）所収p.220）。1888年マッケンジーが没すると、李鴻章は彼を記念して天津に馬大夫医院（Mackenzie Memorial Hospital）を開院させたほど、信頼をしていた。光緒六年（1880年）六月、慈禧太后が数ヶ月患っていたのを知った李鴻章は、その治療を西洋医に依頼した。やはり高晞氏によれば、治療したのはロンドン伝道会医師トーマス・コ克蘭（漢字名、科克倫）であった。快癒を喜んだ慈禧太后は19世紀末に銀万両の資金を提供、この結果1903年には協和医学校および協和医院が設立されたという（前出「在近代中国的“医学伝教”」p.220，前出『中国医学史話』p.244）。これらの逸話は、19世紀末には西洋医学への理解が王朝上層部奥深くに拡がったことを示していることは確かである。

- (61)前出クロイツァー『近代中国の伝統医学』p.51および前出『中国医学史話』p.246。なお、李鴻章が西洋医学に理解を示していた追加事例として、孫文が学んだ西医書院（1887年創立）の「名誉賛助人」に名を連ねていたことを挙げることができる（雷祿慶『李鴻章新伝』（上）p.392，1983年台湾文海出版）。なお、1887年11月、李鴻章が「舌癌」を疑われると（じつは舌膿腫であった）、西医書院賛助人となっていた李鴻章のために、教務長P・マンソンが香港から天津に急遽出向き治療したという逸話が生まれている（前出、朱真一『従医界看早期台湾与欧米的交流』p.48）。

- (62)クリスティ（矢内原忠雄訳）『奉天三十年』（岩波文庫，1938年）上，pp.132～144。

- (63)『申報』1894年12月19日（光緒二十年十一月二十三日）「行軍以医生為要説」。

- (64)前出『中国医学史話』p.226。1902年、海軍局の一寓を借りて陸軍医学堂を創弁、日本の二等軍医平賀精次郎を総教習とした。1906年には自前の校舎（天津）をもつ陸軍軍医学堂とした。民国成立後この学堂は北京に移遷され、中国最初の陸軍医学校となった。

- (65)『申報』1904年3月5日（光緒三十年正月十九日）「中国宜入紅十字会説」。

- (66)池子華「略論孫中山对中国紅十字運動的貢獻」『民国檔案』2006年第4期，p.57。

- (67)共愛会について。留日中国人学界の機関誌の一つ『江蘇』1903年5月27日「軍国民教育会之成立」の中に「共愛会のことが起こった」と紹介され、本文中に見た共愛会の動勢が伝えられている。

- (68)胡彬夏らの日赤篤志看護婦人会への入会については、日赤『篤志看護婦人会会報』第七号（1903年11月）p.50「雑録」欄「支那留学生の入会」およびp.63「彙報」欄「本会」において入会事情およびメンバーが記載されている。中

国人女性が日赤「社員」に加わり篤志看護婦人会「会員」となった初例であるとする。なお、この情報は、1996年8月に日赤本社図書・資料室（現情報プラザ）嘱託吉川龍子氏よりご教示いただいたものである。

(69)秋瑾「看護学教程」翻訳に関する分析については、前出、拙稿「清末中国の赤十字活動に関する一考察」を参照されたい。

(70)中国婦人会については、煉石「可敬京師四川女学堂之学生 可敬哉中国婦人会之書記」、『中国婦人会章程附紀略』（『中国新女界雑誌』第二、第三期、李又寧・張玉法主編『近代中国女権運動資料』下、pp.940～950）による。「北京中国婦人会は……多数の女学生が嚴風風雪の中に立って募金活動を行い、飢え苦しむ生命を救済することでもって国家の元気を万に一つでも補おうとするもの」（p.944）、「乙巳〔1905年〕秋に日本に遊歴したとき、日本の愛国婦人会、赤十字社・篤志看護婦会などの発展を見、……中国婦人会を創弁する志をもった」（p.949）ものである。婦人会について補記するならば、『日本赤十字』第4号（1892年3月）が、デュナン「戦争に於ける婦人」（執筆年は不詳であるが、内容からして普墺戦争の直後と考えられる）を掲載し、デュナンが説いた救護における女性によるケアの大切さに注目した。翌号（第5号、1892年5月）では前号に呼応するかのように「普魯西〔プロシア〕本国婦人会」を掲載、1866年～80年の15年間に及ぶ戦時救護活動と1869年以降の平時救護事業への拡張を紹介した。極東アジアにおいて、「婦人会」形式による女性救護活動を推奨した最初の動勢と考える。篤志看護婦人会を先端にして、救護活動を内容とする女性の組織を呼称する目的でもって「婦人会」という用語が盛んに使用された。

(71)秋瑾「贈京師衛生女学医院廖太夫人」、郭長海・郭君兮輯注『秋瑾全集箋注』（吉林文史出

版社、2003年）pp.228～230。

(72)前出、秋瑾訳「看護学教程」、『秋瑾全集箋注』p.525。

(73)秋瑾「光復軍起義檄稿」や「光復軍軍制稿」、前出『秋瑾全集箋注』pp.397～403。

(74)革命派「中国同盟会 革命方略」、前出『孫中山全集』第一巻、pp.296～318。

(75)同上〈招降滿洲將士布告〉、前出『孫中山全集』第一巻、pp.312～313。

(76)孫文における革命戦争の構想について。義和団事件が転機であったと筆者は考えている。義和団蜂起と欧米日連合軍との戦争が惨敗に帰した3年後（1903年12月）孫文はハワイのホノルルにおいて「中国になぜ革命が必要なのか、中国が積弱だからである。義和団の戦役では〔わずか〕二万の西洋の軍隊に北京が攻略されたが、もし四億人〔の軍兵〕が一斉に奮起したなら、いったい〔西洋の軍隊といえども〕どうなったことやら。我々は満州政府を転覆し、民国を建設しなければならない」（『在檀香山正埠荷梯厘街劇院的演説』『孫中山全集』第一巻、p.226）——孫文には、中国が4億人の統一した「国民軍」をもってすれば、西洋の軍隊であれ打ち負かせるし、ましてや清朝政府など畏れるに足らないとの思いがあった。この直後の友人への返信でも「私はいま、ホノルルにいる。これまでの『〔会〕党』の字などは『〔革命〕軍』の字に改めん。今後、同志は〔革命あるいは国民〕軍を自称すべし」（『復某友人函』『孫中山全集』第一巻、p.228）、「我ら同志はここのところ軍事決起の一事に専心していて海外活動する暇が取れなかった」（『復黄宗仰函』『孫中山全集』第一巻、p.230）などと言っており、革命軍、国民軍を編成して内戦、市民戦争を起こす企図、戦略転換のあったことが十分に窺われる。

(77)革命派「中国同盟会 革命方略」〈招降滿洲將士布告 附：条件〉、前出『孫中山全集』第一巻、

p.315。

(78) 清朝当局における戦時救護の技術論について。

じつは、この現状については革命側だけの課題ではなく、内戦に対峙することとなる清朝当局側でも同様であった。孫文ら革命派が戦時救護を想定しはじめたのと相前後して、清朝当局も同様の動きに出ていた。1901年李鴻章が死去したことにより、その直後、後継者となった袁世凱の下で、清軍が本格的な新式化をめざし、北洋軍の軍内に医務官を設置、紅十字会を設立することとした。また、北洋海軍の一房を用いて陸軍医学堂を開設した。その後整備がどのように進んだのか、詳細については今後の研究が待たれる。少なくとも、この動きは1906年の陸軍軍医学堂（天津）の設立、1907年の陸軍部官制の議定、軍医司の設置や軍医編制の組成につながった。日本に倣って、ドイツ式の軍制・軍医編成をとったものである。一連の軍制改革（新建陸軍の編成）にRed Cross精神やその行動様式がどのように関わっていたのかについては、残念ながら不詳である。ただし、1907年袁世凱の支援下で天津「医科学堂」（北洋女医院）を創設した女医として、金韻梅（金雅妹とも別記）が知られる（謝長法「清末民初的留美女学生」，丁新豹ほか主編『近代中国留学生論文集』香港歴史博物館，2006年所収。成田静香「ある中国人女性の神戸における医療伝道」，関西学院大学『人文論究』48-3 参照）。彼女は、在日華僑であった孫滄とともに1911年天津紅十字会を創設したとされる人物である（池子華『紅十字与近代中国』p.14，安徽人民出版社，2004年）。北洋軍内に紅十字会を設立する企画と天津紅十字会の創設とが相互に関連した可能性が考えられる。該註については、ラルフ・ローリン・パウエル（陳澤憲・陳霞飛共訳）『中国軍事力量的興起1895-1912』（中国社会科学出版社，1979年）および陳邦賢『中国医学史』（上

海商務印書館，1954年修訂重版），鄭曼青・林品石『中華医薬学史』（台湾商務印書館，1982年），前出『中国医学史話』（北京科学技術出版社，1994年）なども参照した。

(79) 鄒振環の研究とは、「孫中山惟一的一部訳作」（『訳林旧踪』江西教育出版社，2000年，p.94）。

(80) イスラエル・エプシュタイン（久保田博子訳）『宋慶齡——中国の良心・その全生涯』（上）（サイマル出版会，1995年）pp.110-111。初めて武昌蜂起成功（1911年10月）を新聞報道で知った時、孫文は米国コロラド州デンバーに在った。その後、ニューヨークを経由して欧州に向かう。11月にはロンドンにいた。カントリー邸にて帰国要請の秘密電報を受けた（カントリーによれば、誕生予定の共和国の大統領に推挙する内容であった。James Cantlie “Sun Yat Sen and the awakening of China” p.21, published by General Books LLC, 2009）。が、即座に帰国の途につかず、パリに立ち寄り、マルセイユ港から地中海、スエズ運河、インド洋経由で中国に向かった。香港に到着したのは12月下旬である。なお、「Ⅷ. むすびにかえて」における宋慶齡関係の記述は、Red Crossに関わる要所をエプシュタインの伝に依ったが、若干の回憶誤認については訂正した（註83，84を参照されたい）。他の研究として、尚明軒「宋慶齡論」（慶応通信『近代中国人物研究』1989年），陳廷一『宋慶齡全伝』（中国社会科学出版社，2004年），盛永華主編『宋慶齡年譜』（広東人民出版社，2006年）も参照した。尚明軒氏は、宋慶齡が米国ウェスリアン・カレッジ時代に発表した短編小説「四小点」は「博愛精神をたたえたもの」とする（p.321）。尚明軒，陳廷一両氏は、ともに出征軍人慰労会を核にした宋慶齡の紅十字会組織に言及するが、彼女がその後どのように紅十字会に関わったかについては触れていない。盛永華主編『宋慶齡年譜』（上）では、宋

慶齡らの維持したRed Crossを「国民党党立紅十字会」と表記している (p.303, 310)。「党立」とする趣旨については今後の研究課題である。

(81)前出, 註(39)『中国紅十字 [1904-2004] 歴史編年』p.45。

(82)前出, エプシュタイン『宋慶齡』(上) p.111。

(83)前出, エプシュタイン『宋慶齡』(上)では宋慶齡が国民党政府の婦人部長となったとする (p.221)。2006年に刊行された盛永華主編『宋慶齡年譜』では1926年当時, 婦人部長であった何香凝が一度ならず辞意をもらし宋慶齡に替わってほしい旨を申し出ていたが, 最終的にはそのまま何香凝が婦人部長職を継続, 宋慶齡は婦人部長にならなかったことが明記されている。宋慶齡=婦人部長とする説は広州『民国日報』の「誤」報道であるとの指摘である (上, pp.303~304 〈(1926年) 1月26日〉の条および註①)。

(84)前出, エプシュタイン『宋慶齡』(上)では, 宋慶齡が国民党政府衛生部長となったとする (p.256)。が, 註(83)の指摘と同様に, 盛永華主編『宋慶齡年譜』では漢口『民国日報』の「誤」報道であり, 衛生部長となったのは劉瑞恒であったとする (上, p.337 〈(1927年) 3月14日〉の条および註①)。劉瑞恒は米国ハーバード大学で医学を修めたのち帰国, 1924~25年には北京協和医院の院長代理をつとめていた人物であり, 孫文の癌手術にも立ち会った。

(85)前出, 鄒振環『訳林旧踪』p.94。